銭湯から発信するホットな生活情報

1010

湯の中で洗ひざらいのせんづくし

【銭湯人インタビュー】女優 吉野紗香さん

108

2011/FEBRUARY

銭湯だからいい子が育つ

銭湯浴育研究会

第6回

形はいろいろだが浴育は必ず銭湯再生の切り札になる

「お花見に行った時のことです。そこにはシルバー世代のグループもいて、彼らが『めだかの学校』を歌い始めたところ、3歳の息子がおもむろに『銭湯』と言ったのです」

前号で紹介した浴育イベント「銭湯であそぼう！」に参加したあるお母さんは、驚きの体験をこう語りました。イベントで行われた「めだかの学校」のオカリナ演奏を思い出したらしい、というのです。幼児の記憶の中で、銭湯と「めだかの学校」が同質のものとなっていたのでしょう。

「大勢で大きなお風呂に入るのはめったにない経験です。子供なりに心に響いているようです。楽しい記憶としていつまでも残ってほしいと願うばかりです」と

このお母さんは期待を込めますが、お母さん自身の銭湯経験はどうなのでしょうか。

「内風呂で育った世代なので、銭湯には数えるほどしか行ったことはありません。しかも、何年振りかの銭湯でしたが、そこには確かに昭和の世界がしっかりとありました。なんだかとても懐かしかったです」

イベントの舞台となった東村山の久米川湯は何か変化はあったのでしょうか、オーナーの金子浩さんに訊ねてみました。

「このイベントはすでに4回行いました。やはり継続は力になるのでしょう、小さいお子さんが母親と来湯するケースが増えました。特に土日。他の銭湯では子供の入浴数がほとんど見られないのにね。広々とした銭湯空間に衝撃を感じたからでしょう。想定を超える結果だったといえますね」

このイベントで変わったのは親子だけではありませんでした。主催したスタッフにも、いろいろ心の変化があったようです。

「カランやたくさんの鏡、靴箱や古い体重計……。銭湯には普段見たことがないものがいっぱいあって、まるで違う特別空間です。この中で親子が思い思いに楽しみ、いきいきしている様子はファインダーを通してもビンビン伝わってくるのが分かります」というのは、毎回カメラマンとしてイベントを記録し続けている片山しをりさん。以下、多くのスタッフの声です。

・ある日のたった1本の電話からこんなにたくさんの人と関われるとは思っていませんでした。（吉田ちひろさん）

・幼い頃以来疎遠になっていた銭湯ですが、イベントに参加するたび新しい魅力に気づかされます。（利光夢子さん）

・「やる」という枠組みだけで、ゼロから創っていくのは滅多にできる経験じゃありませんから楽しいです。周りの仲間からたくさんのこと学びました。（古内信伍さん）

・とてもいい機会をもらったというのが率直な感想です。自分も銭湯に世話になった人間なので、銭湯のよさを知ってもらえて嬉しいです。また、自分たちが学ばせてもらったことにも感謝しています。（井上雄太さん）

・銭湯イベントに参加して、地域の温かさを感じました。このような地域交流のイベントを通して、たくさんの人が子育てに関心を持って欲しいなと思いました。また、いろんな世代の人が同じイベントを楽しんでいる姿は本当に素敵で、いい空間だなと思いました。（辻本奈津子さん）

このほかにも多くのスタッフから感動の言葉が寄せられましたが、こうしてみると、幼児のための浴育イベントを主催した側にとっても銭湯がよき「学びの場」であったことがうかがわれます。

（上）「銭湯であそぼう！」のスタッフと久米川湯の金子オーナー（右端）
（右）スタッフにとってもいろいろな経験と出会ったイベントだった

浴育という言葉は、入浴行為（あるいは風呂場）が子育てにとって大変有効だから積極的に活用しよう、という趣旨から生まれました。不特定多数の人々が入浴のために集う銭湯なら、もっと大きな浴育効果を生み出せるに違いない――そう考えて、東京でも様々な人たちが銭湯を舞台に「浴育現象」を起こしています。本誌では6回にわたってそのいくつかを紹介してきましたが、軒数がどんどん減っている銭湯の再生・復活に、「浴育」が起爆剤となる可能性は大きいかもしれません。ただ、そのような目先のことばかりでなく、とりわけ多くの若者が日本の将来に希望を失っているこの時代、地域の中の自分、人と人の関わりの中にいる自分を実感し、それを子供たちにも伝えていく格好の場として、今こそ銭湯と浴育が必要なのだ、と考えるべきではないでしょうか。